

## ベトナムの考古文化 (4)

——新石器時代中期——

訳・解説 菊池 誠 一

### はじめに

本稿は、ハノイ国家大学人文社会科学大学歴史学科の教科書であるベトナム語本 *CO SO KHAO CO HOC* (2008) (『考古学の基礎』) の翻訳である。『学苑』No. 840 に掲載された「ベトナムの考古文化 (3)」のつづきで、下記の第2部第1章3-2. にあたり、新石器時代中期をあつかう。

- 第2部 第1章 2-1. 前期旧石器時代 (グエン・カック・スウ著)
- 同 2-2. 後期旧石器時代 (グエン・カック・スウ著)
- 同 3-2. ベトナムの新石器時代 (ハン・ヴァン・カン著)
- 第2部 第2章 2-1. ベトナム北部の青銅器時代 (ラム・ティ・ミィ・ズン著)
- 同 2-2. ベトナム中部の青銅器時代 (ラム・ティ・ミィ・ズン著)
- 同 2-3. ベトナム南部の青銅器時代 (ラム・ティ・ミィ・ズン著)
- 第2部 第3章 2-1. ベトナムのドンソン文化 (ホアン・ヴァン・コアン著)
- 同 2-2. ベトナムのサーフィン文化 (ホアン・ヴァン・コアン  
／ラム・ティ・ミィ・ズン著)
- 同 2-3. ベトナム南部の初期鉄器文化 (ホアン・ヴァン・コアン著)
- 第2部 第4章 ベトナムの歴史考古学  
(グエン・チュウ／ホアン・ヴァン・コアン／グエン・スオン・マイン／  
ラム・ティ・ミィ・ズン／ハン・ヴァン・カン著)

なお、ベトナム語を表記するにあたって声調記号と発音記号を省略し、訳出にあたっては意識した箇所もあることをおことわりしておく。

### 第2部 第1章 3 ベトナムの新石器時代

#### 新石器時代中期

ダーブット (Da But) 文化、クインヴァン (Quynh Van) 文化、カイベオ (Cai Beo) 遺跡、そしてバウズウ (Bau Du) 遺跡は新石器時代中期に位置づけられる。これらの文化は遺跡・遺物や技術発展の違い、そして生業形態によって明確に分別される (図1)。

## ダーブット文化

ダーブット文化はおよそ 80 年前に発見され、研究されてきたが、これまで 8 遺跡が知られているだけである。それは、タインホア (Thanh Hoa) 省のダーブット、バントゥイ (Ban Thuy)、ランコン (Lang Cong)、ゴーチュン (Go Trung)、コンコグア (Con Co Ngua)、そしてニンビン (Ninh Binh) 省のドンヴォン (Dong Vuon)、ハンコー (Hang Co)、ハンサオ (Hang Sao) である。遺跡は少ないが、遺跡の種類は多様である。ダーブット遺跡はインガイ科の貝層をもち、ゴーチュンは海岸砂丘の貝塚であり、コンコグアは二つの文化層があり、下層はインガイ科の貝層で上層は土層である。さらには、ダーブットやコンコグアのように墓跡をともなう遺跡もある。このように、ダーブット遺跡などは野外遺跡であり、ホアビン文化やバクソン文化と様相を異にしている。ダーブット人は山地から丘陵地帯に、そして海岸地帯までおきて生活していたのである。

ダーブット文化は石器と土器に最も特徴があらわれている。

ダーブット人はホアビン-バクソン文化の伝統を継承しながら、石材使用を刷新、石器製作技術を革新し、新たな形態を生みだした。ダーブットの石器は通常、ホアビン-バクソンの石器と類似する外形で、礫器、スクレイパー、刃部磨製石器、磨製石器がある (図 2)。

特にコンコグア遺跡の下層で出土した石斧はダーブットで出土したものより進歩したものである。石器は剥片で製作されていた。特に、磨製斧は石斧のなかでも 60 パーセントを占め、数量的に多い。平均的な大きさの梯子形斧は全面磨製である。ダーブット文化の終末では、ゴーチュン遺跡のように、石器製作技術がかなり発展し、石器の種類も豊富になった。斧、スキ、ノミ、ノコギリ、ウス、石皿のほか、キリ先、車輪形腕輪、石製・土製の錘である。錘は紡錘形、あるいは紐をかける溝をもつ丸いタイプがある。これは、ベトナムにおいて漁網による漁を証明する最初の発見であった。

ダーブットの土器はかなり粗製で小石が混ざる。土器の主要な種類は丸底の鍋で脚をもたない。簡単な形で、口縁部は高さをもち、直立か少し外反し、胴部は丸く、文様は外面に密に叩きがほどこされている。土器は手で粘土の塊から作りだし、叩き板と当て具を使う。土器はかなり厚く硬い (図 2-2)。

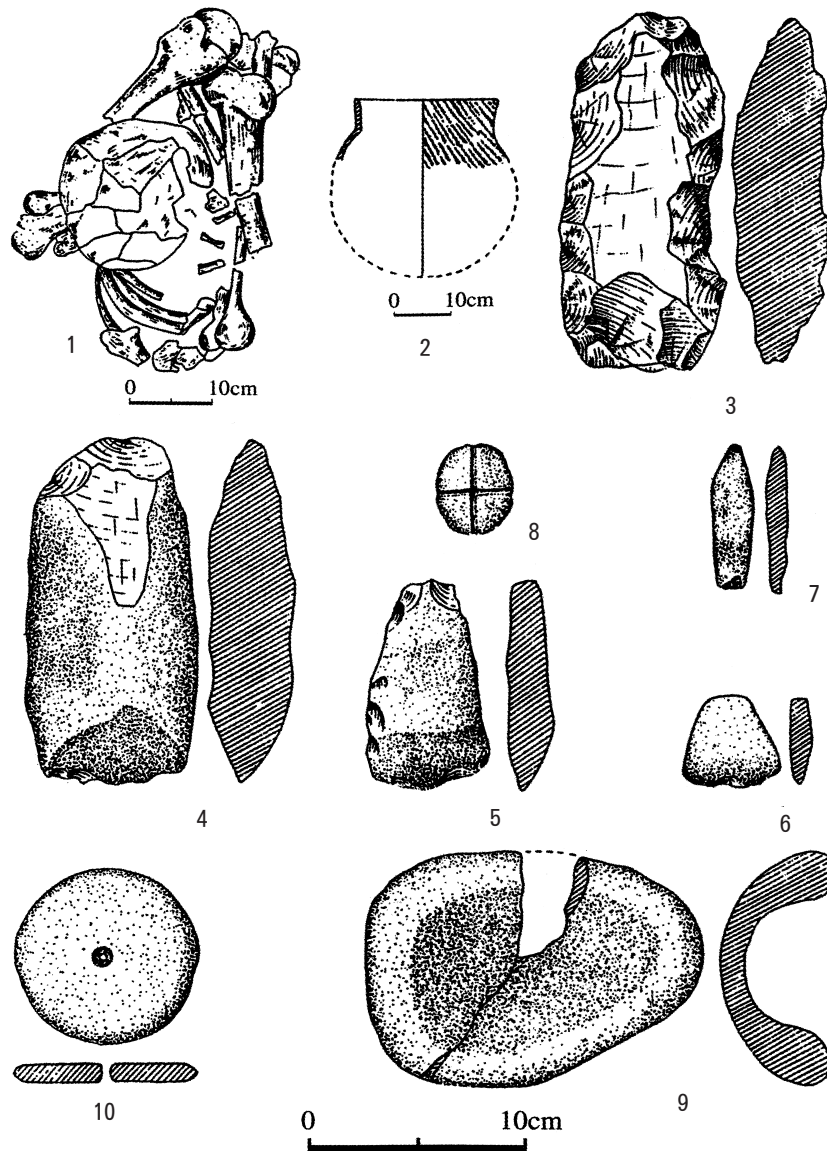
この時期の石器には比較的多くの変化がみられるが、土器はほとんど変化していない。ダーブットはベトナムにおいて最も早くに誕生した土器作り村のひとつとみなすことができる。

ダーブット人は死者を居住地に埋葬した。単独墓のほかに集団墓もある。コンコグア遺跡で考古学者たちは 1 基の墓に数十の人骨を埋葬した墓跡を検出した。死体は多くの異なる姿勢で埋葬され、例えば座位葬、伸展葬、側臥屈葬などがあり、そのなかで屈葬が代表的な埋葬である (図 2-1)。

ダーブット人の生態環境は、ホアビン-バクソン人の生態環境と異なっており、河口や海岸、野外に居住していたため、生業も異なっていた。彼らは汽水や海の軟体動物を採り、シカ、スイギユウ、



図 1 新石器時代中期の主要遺跡



Bản vẽ 12: Mộ táng, hiện vật đá và gốm văn hoá Đa Bút  
 1. Mộ táng; 2. Hiện vật gốm; 3-10. Hiện vật đá  
 (Nguồn: Hà Văn Tấn, 1998, tr. 394)

図2 ダブット文化の墓葬(1)と土器(2)、石器

ウシ、ブタ、ヤマアラシなど森林の動物を狩りした。これらの獣骨はダーブット文化の遺跡で確認されている。さらに、獣骨の鑑定結果から、ダーブット人はイヌ、スイギュウ、ブタの飼育を知っていたことが知られる。コンコグア遺跡の花粉分析から栽培を知っていたと推定できる。

錘と魚骨の検出から漁網による漁撈を証明できた。ダーブット人の生業は多様であり、高度に発展した。ダーブット人は海への志向をもつ人びとであった。彼らはホアビン-バクソン文化の伝統を継承し、ティンホアとニンビン(Ninh Binh)の海岸平野部で7,000~5,000 BPの時期に新石器化過程を強力に推し進めたのである。

## クインヴァン文化

1930年から今日まで、クインヴァン文化にかんする70年余の研究の歴史がある。現在、21遺跡が確認され、ゲアン(Nghe An)とハティン(Ha Tinh)の海岸など、主要な遺跡はクインリュウ(Quynh Luu)古湾周辺に分布している。遺跡は炊事ゴミの堆積物である。クインヴァン文化の遺跡は通常、鉢を伏せたような形、環状、または不確定な形をしており、大多数は貝塚である。クインヴァン文化は自然と人びとの生業活動の結果として作りだされたものである。各遺跡は現在の海岸から1~7 kmほど内陸にある。

文化層の主要な動物遺体は海産の二枚貝である。貝層には獣骨や石器、炉跡がみられる。遺構や遺物の分布状況は一様ではなく、遺物の多い文化層や少ない文化層がみとめられる。レンズ状の貝殻層やカニ殻層、タニシ層、そして大型の二枚貝層に遺物が集中している。

クインヴァン文化の石器は数量的に少なく、多様な形態変化もなく、粗製の打割技術で製作されている。以下に代表的な石器を紹介する。不定形な石器、皿形石器、カンラン形石器、アイロン形石器、ザボン形石器、長形斧石器、短形斧である(図3)。

クインヴァン文化の石器はホアビン文化の石器に似ている。クインヴァン文化の主要な石器製作技術は直接打法である。

磨製技術も確認されているが普及していない。また、クインヴァン遺跡の各地点やコンロゴイ(Con Lo Ngoi)遺跡、コンダット(Con Dat)、ゴーラップバック(Go Lap Bac)では石皿、石杵がみつまっている。

骨製品は大変少なく、ファイナム(Phai Nam)で5点の鏃、クインヴァンで3点のくぼんだノミがあるだけである。骨製品は少ないだけでなく、サイズも小さい。装飾品も大変少なく、単調な形であり、クインヴァン遺跡の8号墓から穴のあいた貝殻が4点出土した。

クインヴァン文化の土器は粗製で大きく、ほとんどが煮炊き用であり、巻き上げ技法で叩き板と当て具によって作られている。クインヴァンの土器は次のようなものである。

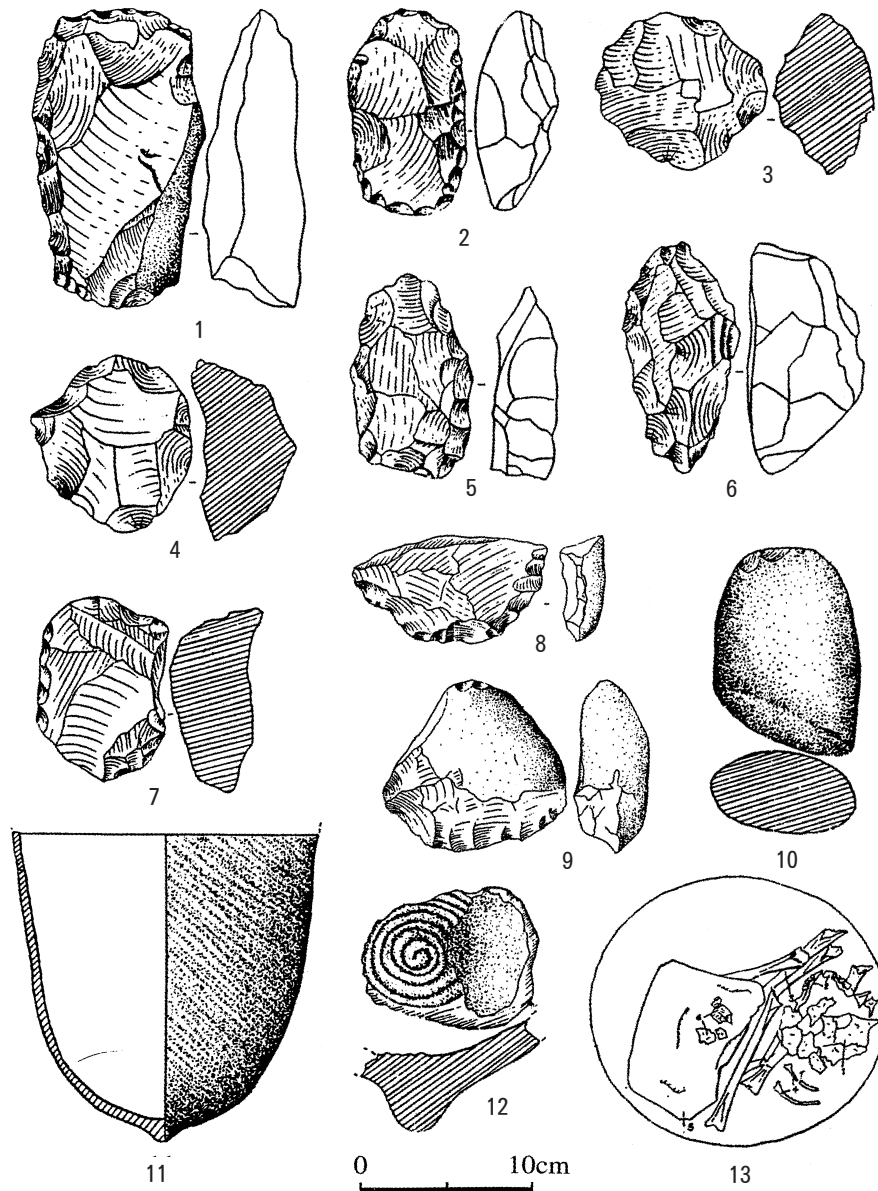
- (1) 丸底の土器で、溝のある叩き板で製作されたもの。
- (2) 丸底の土器で、縄を巻き付けた叩き板で製作されたもの。
- (3) 丸底の土器で、外面に縄席文(縄を巻き付けた叩き板でつけられた文様)、内面に削りが施されたもの。
- (4) 尖底の土器で、内外面とも削りが施されたもの。

尖底土器はジョウロ形の口縁で30~50 cmの大きさで、尖底の厚さは1~2 cmである。内外面とも削り調整された尖底土器は、クインヴァン文化の最も代表的な土器である(図3-11)。

主要な土器は毎日の食料である軟体動物を調理する煮炊き用土器である。煮炊き用の炉跡もクインヴァン遺跡、ファイナム遺跡、コンダット遺跡で確認でき、これまで49基の遺構が検出されている。

墓跡は31基発見されている。死者は居住地に埋葬され、円形、あるいは円形に近い墓で大きさは30~70 cmあり、石器や土器片が副葬されている。クインヴァンの墓は単葬で、死体は横臥、あるいは屈葬である(図3-13)。31基のうち、25基に副葬品があり、各墓は2~3個の石器、13号墓は13点の石器、14号墓は17点の石器が副葬されていた。クインヴァン人は海水や汽水の貝類を採取し、生活していた。ほかに、魚やカニ、カメ、サイ、ヤギユウ、スイギユウ、シカ、ゾウ、仔ジカなどを食料としていた。現在までのところ、馴致された獣骨の痕跡はみつからない。

クインヴァン文化は6,000~3,500 BP頃に存在した文化である。

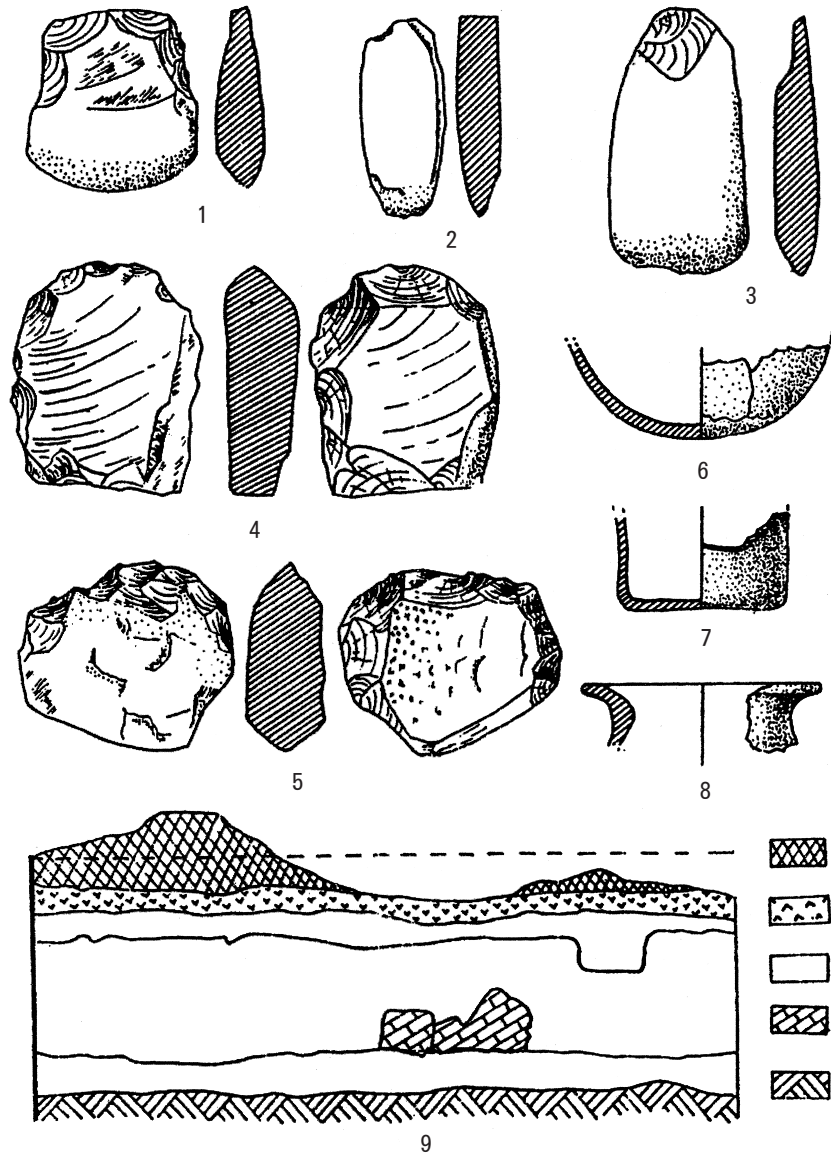


Bản vẽ 13: Mộ táng, hiện vật đá và gốm văn hoá Quỳnh Văn  
1-10. Hiện vật đá; 11-12. Gốm đáy nhọn; 13. Mộ táng  
(Nguồn: Hà Văn Tấn, 1998, tr. 395)

図3 クインヴェン文化の墓葬(13)と土器(11, 12), 石器

### カイベオ遺跡

カイベオ (Cai Beo) はハイフォン (Hai Phong) 市カットバー (Cat Ba) のハイドン (Hai Dong) 社にあり、M. コラニーが発見した遺跡で1938年に公表された。1972年4月、考古学院が2箇所のトレンチを入れたが、M. コラニーが公表したようなハロン (Ha Long) 文化に属する遺跡と遺物を確認しただけであった。1973年8月に考古学院はカイベオにおいて221 m<sup>2</sup>の広さの発掘調査をし、3つの文化層を確認した。第一文化層は新石器時代前期、第二文化層は新石器時代後期、第三文化層はハロン文化である。1981年にはベトナム歴史博物館が78 m<sup>2</sup>を発掘調査し、無遺物層によって分離された二つの文化層を確認した。1986年に考古学院が90 m<sup>2</sup>を発掘調査した。この調査では無遺物



Bản vẽ 14: Địa tầng, hiện vật đá và gốm di chỉ Cái Bèo  
 1-5. Hiện vật đá; 6-8. Hiện vật gốm; 9. Địa tầng hố khai quật  
 (Nguồn: Hà Văn Tấn, 1998, tr. 397)

図4 カイベオ遺跡の土層図(9)と土器(6, 7, 8), 石器

層を確認できなかったが、連続する二つの文化層を確認した。現在、カイベオ遺跡にかんする統一した見解は、この遺跡には二つの文化層があり、下層は新石器時代中期(カイベオI)、上層はハロン文化(カイベオII)という考えである。

カイベオIの層は1mの厚さがあり、ハロン文化層とは異なる石器・土器がある。以下ではカイベオI層の文化的特徴を紹介する。

カイベオ人は多くの石材を使用し、石器を製作した。例えば、礫、砂岩、玉、石瑛などである。粗製石器の半分ほどは石瑛で作られている。粗製石器は50%を占め、その特徴は三角形、梯子形、楕円形石器である。ほかに、石皿、石杵などがある。また、刃部磨製や身まで磨かれた楕円形や杏仁形の石器もある(図4)。

カイベオの土器は豊富でダーブットやクインヴァンの土器と識別できる。カイベオの土器は大粒の

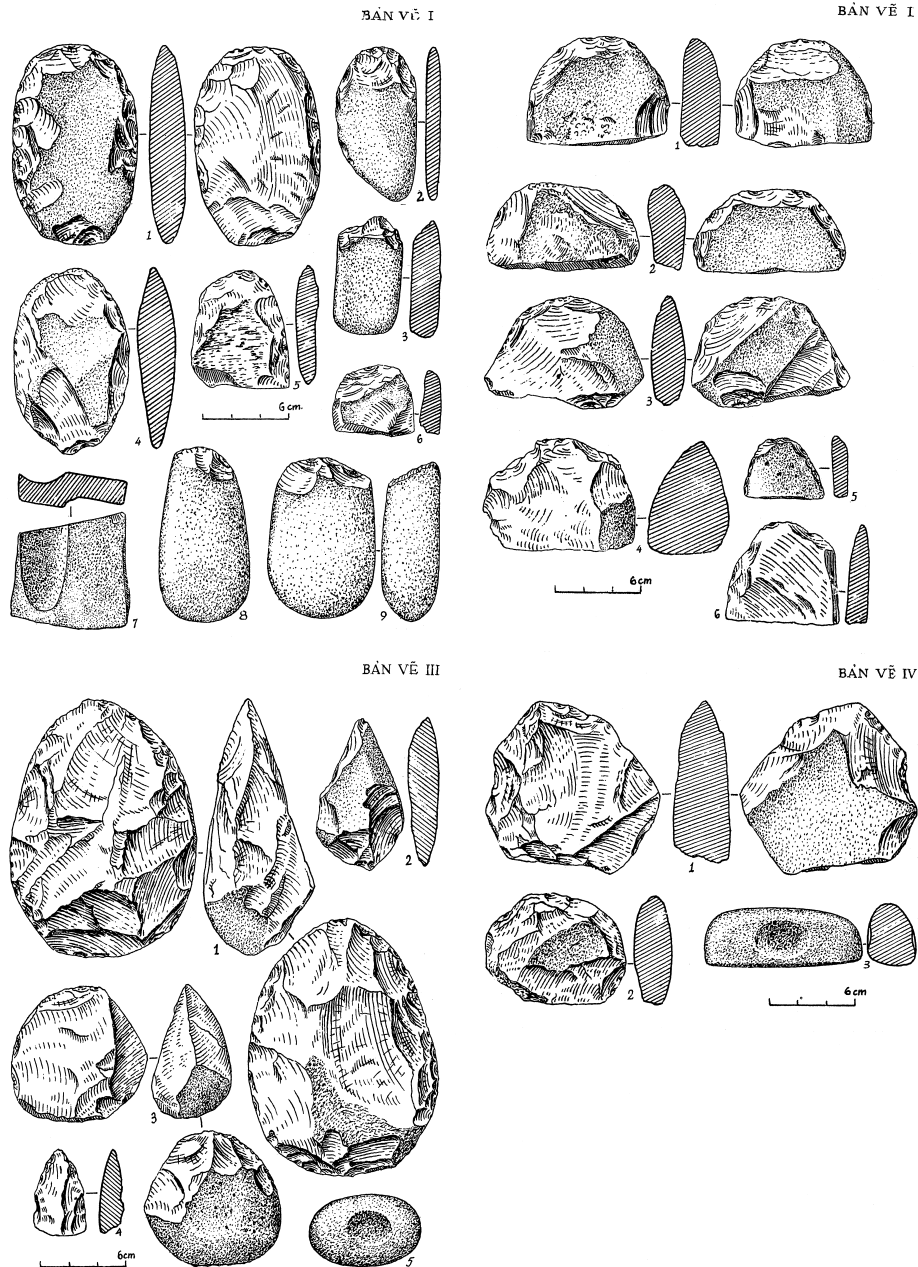


図5 バウズウ遺跡の石器

(*Nhung Di Tich Thoi Tien Su ra So Su o Quang Nam-Da Nang*から菊池引用)

砂粒や植物繊維を混ぜている。土器は二種類あり、粗製の厚く硬い土器と粗製の厚く軟らかい土器である。

器種は単純で二種類に分けられる。ひとつは口縁部が外反し、頸部はくびれ、球形の胴部で丸底である。これのほとんどは無文であり、貝殻による文様が若干みられる。ふたつめは口縁部が立ち、胴部が真っすぐで平底で、叩き文様、織物による文様の痕跡がある。巻き上げ、あるいは引き伸ばしにより、叩き板と当て具を使う。このようにカイベオ土器は、ダーブット土器よりも豊富で多様でまた技術面や文様面でも多様である。カイベオ遺跡は独立した土器作りセンターであった。

カイベオ人は採取や狩猟、漁撈を生業とした。彼らは海への志向があった。カイベオの資料はホアビン-バクソン文化との関係やハロン文化の起源を考えるうえで重要である。

## バウズウ遺跡

バウズウ (Bau Du) 遺跡はクアンナム (Quang Nam) 省タムキー (Tam Ky) 市のタムスオン (Tam Xuan) 社にあり、周囲の田畑よりも 2 m ほど高い丘に立地している。1981 年に発見され、3 回の試掘が実施され、その面積は 24 m<sup>2</sup> (1981 年; 1 m<sup>2</sup>, 1982 年; 2 m<sup>2</sup>, 1983 年; 21 m<sup>2</sup>) であった。1985 年に 100 m<sup>2</sup> の発掘調査が実施された。その試掘や発掘調査の結果、多くの遺構や遺物が検出された。

まずバウズウ遺跡は貝塚と墓跡である。この遺跡は単一の文化層をもち、厚さは平均 1.30~2.10 m である。遺構や遺物の大多数はこの時代に属し、地表面の土器片 200 点ほども青銅器時代のバウチャム (Bau Tram) 遺跡の土器とよく似ている。

バウズウ遺跡の石器は皿形石器、杏仁形石器、短斧、粗製石器、チョッパー、小穴のある石器のようにホアビンの石器と類似している (図 5)。これらは石瑛など、また剥片から製作されている。バウズウ人はホアビン人のように礫だけから作りだすのではなかった。なぜなら彼らは原石が少なかったのである。

試掘や発掘調査を通して、考古学者たちは 5 基の墓跡を検出した。貝層に穴を掘り、あるいは大形の貝層に埋葬された。死体は屈葬である。

獣骨や貝殻はかなり多い。それらはサイ、スイギュウ、ウシ、シカ、ヤギ、サル、魚骨、貝類、海カニなどである。馴致された獣骨は未検出である。

このように石器はホアビン文化の伝統をもち、埋葬方法はクインヴァン文化やダーブット文化と類似する。遺跡の C 14 年代は 5,000~3,500 BP である。バウズウ遺跡は中部における土器出現以前の新石器時代の遺跡である。

バウズウ人の主要な生業は採取と狩猟であり、そのなかで貝採取は重要な役割を占めていた。

ダーブット文化やクインヴァン文化とともに中部のクアンナム地域に出現したバウズウ文化は海洋志向に生業を拡大したことを証明するものである。

## (解説)

ベトナム考古学界では、新石器時代を前期・中期・後期に分けている。この中期に属するのが北部のダーブット文化、クインヴァン文化、カイベオ遺跡、そして中部のバウズウ遺跡である。

1978 年版の *CO SO KHAO CO HOC* は、ダーブット文化の遺跡として、指標遺跡であるダーブット貝塚を記載するのみであった。しかし、現在では本書に紹介されたようにこの文化に属する遺跡は、タインホア省とニンビン省で 8 遺跡が確認され、文化内容も明確になりつつある。その点で新版の特徴がみられる。

ベトナムにおけるダーブット文化研究を牽引してきたベトナム考古学院のブイ・ヴィン (Bui Vinh) 氏は、ダーブット文化研究の歴史を 4 期に区分し、総括している。それによると、第一期 (1926-32 年) は 1926-27 年の E. パット (Patte) によるダーブット貝塚の発掘を嚆矢とし、第二期 (1960-1971 年) ではベトナム人研究者による発掘調査をへて、第三期 (1976-80 年) にゴーチュン遺跡の発見と調査、そしてこの 2 遺跡を検討してダーブット文化を確定し、さらに、コンコグア遺跡の発見によってダーブット文化をダーブット-コンコグア-ゴチュンに発展すると認定したことである。第四期 (1990 年以降) になると、あらたな遺跡の発見・調査とタインホア省以外でもニンビン省の 2 遺跡の発見・調査によってダーブット文化のあらたな研究が展開されることになった、というものである。



ところで、ダーブット文化研究で重要なテーマのひとつが土器の出現問題である。ベトナムにおける土器の出現は、前号(840号)で指摘したように、ホアビン文化の後半段階とする研究者とダーブット文化とする研究者の見解にわかれている。ブイ・ヴィン(Bui Vinh)氏は、ベトナムにおける土器の出現を7,000 BP頃から6,000 BP頃の新石器革命過程の中でダーブット、カイベオ、クインヴァンの海岸地域の平野部で誕生した、と考えている。そして、それらは個々に誕生したもので、それぞれ独自の特徴をもち、基本的にふたつの段階に変遷するという。それは在地の特徴をもつ土器段階と地域間接触がみとめられる土器段階である。初期段階の土器は、手づくね、あるいは粘土紐巻き上げ技法であり、そして叩き板と当て具により製作される。この段階では縄を叩き板に巻き付けた道具の使用は確認されていない。地域間接触段階の土器は、土器に共通性がみられることである。この段階に縄席文(叩き板に縄を巻きつけて土器外面を叩いたときにできる文様)が出現したという。今からおおよそ5,000年前頃である。この段階の土器は、各地で確認され、とりわけホアビン文化の洞穴遺跡からみられる土器もそれであるという。土器が個別に出現したという氏の見解には、筆者は疑問をもち、検討が必要と考えている。

ダーブット文化を扱った研究書としては、2007年にブイ・ヴィン氏の還暦記念として社会科学出版社から刊行された *Hanh Trinh Van Hoa Tien Su Viet Nam* (ベトナム先史文化の階梯) の中の第一部にまとめられた論攷が代表的なものである。

クインヴァン文化を扱った研究書には、1998年に社会科学出版社から刊行されたグエン・チュン・チェン(Nguyen Trung Chen)氏の *Van Hoa Quynh Van* (クインヴァン文化) がある。

北部ハロン湾に浮かぶカットバー島にあるカイベオ遺跡は、その後の当該地域に確認されるハロン(Ha Long)文化ともかかわる海洋文化の様相をもつ。カイベオ遺跡を扱った研究としては、2005年に社会科学出版社から刊行されたグエン・カック・スウ(Nguyen Khac Su)編著の *Khao Co Hoc Vung Duyen Hai Dong Bac Viet Nam* (ベトナム東海岸地域の考古学) の中のいくつかの論攷と、氏の単著で2010年に社会科学出版社から刊行された *Di Chi Tien Su Cai Beo, Dao Cat Ba* (カットバー島のカイベオ先史遺跡) が代表的なものである。

バウズウ遺跡の基本情報は、*Khao Co Hoc* (考古学) の1986年4号に掲載された“Di Chi Bau Du (Quang Nam-Da Nang) Qua Trinh Phat Hien va Nghien Cuu, Ket Qua va Nhan Xet So Bo” (クアンナム-ダナン省のバウズウ遺跡の発見と研究、若干の所見) とダナンで刊行された *Nhung Di Tich Tien Su va So Su o Quang Nam-Da Nang* (クアンナム-ダナンの先史と原史遺跡) である。

## 参考文献

- Bui Vinh 2002 “Lich Su Phat Trien va Nghien Cuu Van Hoa Da But va Qua Trinh Chiem Linh Dong Bang Ven Bien Thanh Hoa” *Khao Co Hoc*, so 3, 12-22.
- Bui Vinh 2004 “Cac Trung Tam Gom Tien Su Dau Tien o Viet Nam” *Mot The Ky Khao Co Hoc Viet Nam tap 1*, 71-82.

(きくち せいいち 歴史文化学科)